

EXAMINATION

物語の機能とマンガ表現	5	小山 昌宏
教育雑誌『ぎんのすず』と学習漫画	23	さいのおきよこ
ふりかえるザネリ	39	木股 知史
〈連載〉戦後、日本で出版された英和対訳のアメリカ漫画 ③	46	渡辺 泰
戦前戦後の新聞雑誌のアメリカ漫画について	62	竹内オサム
〈連載〉変容するマンガたち ②	86	西上ハルオ
手塚治虫『ロスト・ワールド』の謎	90	丸山 昭
MEMORY			
手塚治虫が嫌いになった日	102	畑中 圭一
〈連載〉児童雑誌編集者として・思い出すことも ⑤	129	高橋孝三郎
Birds of a feather flock together.	140	F・M・ロッカー
〈連載〉聞き書き「街頭紙芝居」 ④	170	おさ・たけし
子どもとつくる劇空間めざす紙芝居師	118	吉川真美子
―大塚珠代さんに聞く	166	川勝 泰介
	84	村上 知彦

OBSERVATION

横山まさみちプロ見学記	129	高橋孝三郎
〈連載〉雑誌「少年」のライバルたち ③	140	F・M・ロッカー
この道はいつか来た道?	170	おさ・たけし
「少年画報」よ、どこへ行く!	118	吉川真美子
研文社〈痛快漫画文庫〉参考資料	166	川勝 泰介
	84	村上 知彦

COMPOSITION

〈連載マンガ〉マゲノリア	170	おさ・たけし
--------------	-------	-----	--------

ESSAY REVIEW

ポチの居場所―大野潤子「S・C・ポチ」	118	吉川真美子
風にふかれて児童文化論	166	川勝 泰介
日々是まんが	84	村上 知彦

INFORMATION

- ・執筆者紹介 202
- ・オサムの本 83
- ・バックナンバー 199
- ・近隣大学卒論リスト 195
- ・まぐま 38
- ・編集後記 203

表紙装丁・おさたけし



手塚治虫『ロスト・ワールド』の謎

竹内オサム



◆『ロスト・ワールド』の特異性

戦後、物語性をもつマンガのドラマ作法や内容が、手塚治虫の出現によって大きく変化したことはよく知られている。手塚は、映画的手法による斬新な画面構成、長大なストーリー、あるいは悲劇的なトーンなど、これまでになく物語世界を繰り広げてみせた。戦後のストーリー・マンガは手塚治虫に始まったとみなして誤りはない。

手塚マンガの革新性。その技法的側面について云々されるときには、酒井七馬との合作『新宝島』（一九四七）がよく引き合に出される。実際、ぼくも何度かその点にふれたことがある。だが、

『ロスト・ワールド』は、地球と地球外の天体IIママンガ星を舞台としたSFアドベンチャーである。不二書房版のストーリーは次のように展開していく。粗筋を先に示しておくことにしよう。

ある夜のこと、理学博士の邪我汰良平が何者かの手によって殺害されるというシーンから物語は始まる。駆けつけた執事、人間化したウサギのミイちゃん、それに偶然通りかかった私立探偵のヒゲオヤジは、奇怪な光景を目にすることに。なんと博士の片目がくり抜かれているのだ。博士は、敷島博士から預かった石を、義眼のようにして片目に入れていたという。ヒゲオヤジはミイちゃんの案内のもと、敷島博士の研究所へと向かう。

敷島博士は、動物の人間化を研究。同僚の豚藻負児も植物の人間化を研究している。ヒゲオヤジは敷島博士から、盗まれた石がママンガ星から飛来したエネルギー石であることを聞く。

石を求めて、悪人との格闘が始まる。秘密結社の悪人たちが暗躍しだす。ヒゲオヤジは一時捕らわれの身となるが、身体に傷を負いながらも無事帰還。さらには、研究所員たちの作ったロケット

悲劇的結末をも含めたストーリー展開の巧みさにおいて、初期のSF大作『ロスト・ワールド』（全2巻 一九四八 不二書房）を無視するわけにはいかない。手塚単独の創作であり、またあとで触れるように、何度も描き直しを経た長編でもある。個人のこだわりの深さからも特筆すべき位置にあり、また戦後のストーリー・マンガの発展史のなかでも、特異な位置にある作品といえるだろう。

そこで、マンガ作品の描き変えのあとのたどるこの連載の2回目は、手塚の赤本漫画『ロスト・ワールド』を取り上げてみたいと思う。

に乗って、敷島博士、ミイちゃんたちと、ママンガ星への冒険旅行に出かけるのだった。探検隊のなかには、もみじあやめという、かわいい双子の姉妹がいた。なんとそれは、豚藻博士が植物から作りだした人造人間なのだという。前編「地球編」は、噴煙をあげて遠ざかるロケットの描写で終わっている。

2巻めとなる後編「宇宙編」では、ロケット内部での抗争とママンガ星での冒険が語られる。

まず、ロケットのなかで異変が起こる。密航者が姿を現す。ランプという新聞記者である。他にも悪人たちが乗っているらしく、このままではママンガ星までのエネルギーが足りない。食料も不足していく。その末にランプは、植物から生まれた少女もみじを食べてしまうのだった。

やがてママンガ星の引力によってロケットは目指す星に到着。一行は探検に出かけるが、そこは古代の恐竜たちが住む世界だった。姿を現した悪人たち、また他の隊員たちは恐竜の犠牲となる。

敷島博士とあやめを星に残したまま、ミイちゃん、ヒゲオヤジ、ランプの乗ったロケットは、落雷を

きつかけに地球へと飛び立つ。あとに残された敷島博士とあやめは、二人で暮らすことを決意するのだ。

途中、地球へ戻るロケットからランプが脱落。最後、地上へ激突せんとするロケットからヒゲオヤジが脱出、ミイちゃんはそのまま衝突の犠牲となってしまう。

このように、『ロスト・ワールド』は往還型の冒険譚である。また人間化したウサギの死という悲劇的結末をもつ、当時のマンガとしては異色のマンガだった。もみじとあやめの姉妹、ミイちゃんなど、手塚好みの変容キャラクターが活躍する点でも興味深い。また、少女もみじがランプという男に食べられるというくだり、ふたりの姉妹が豚藻博士の妻になるべく誕生したという出自、あやめと敷島博士をアダムとイブに見立てるラストシーンなど、子ども向けながらもエロティシズムに満ち満ちた物語となっている。いずれにしてもきわめて特異な作品であったことは疑いない。

その悲劇的トーン、変容のイメージ、エロティシズムの表出について考察を深めてみたいところ

この「ロストワールド」私家版は、ぼくが北野中学二、三年の頃に書いたもので、その前に「幽霊男」(「火星博士」のもとになった物語です)を書いたのにつづいています。(中略)

「ロストワールド」はこのあと昭和十八年から十九年にかけて、四百ページほどの大冊で改訂版を書いています。これはいま思い出してもこの第一号よりかなり絵が進歩しており、本当はこちらの方を複製したかったのです。内容も映画的手法をふんだんに入れてスピーディになっています。ところがこの第二号は、学校の友人に貸したまま、行方不明なのです。(中略)

第三号「ロストワールド」は、戦後の翌年(昭和二十一年)の秋から大阪の輿論新聞(今の大阪日日新聞?)に毎日連載した、完全な新聞漫画です。これは新聞自体の都合があつて途中で中断されてしまいました。恥かしいくらい程度の低い作品でした。第四号

だが、その点はまた別の機会にゆずるとして、以下ではこの作品そのものの変容のありさまに焦点をあわせ、描き変えにまつわる問題点のみを指摘するにとどめたい。

◆作品成立の謎

不二書房から一九四八年に刊行された『ロスト・ワールド』(2巻)なる赤本漫画は、手塚自身の証言によれば、前後五回にわたって描き変えられているという。それも比較的短い期間において、のち有名になった手塚は、初期の代表作「ジャングル大帝」「りぼんの騎士」などを、雑誌社の要求に応じて何度も描き変えている。ところがそれらは時代の推移や読者年齢の変化に合わせたもので、作品そのものの内実起因するものではない。その描き変え期間も長期にわたっている。

「ロスト・ワールド」はその点異なる。短期のうち自らの意志より、私家版、新聞連載、赤本単行本、雑誌版と描き変えが行われているのだ。こうした経緯を、手塚は次のように回想している。少し長くなるが引用してみよう。

がれいの不二書房版のことも向け漫画、そして第五号は秋田書店の「冒険王」に昭和三十年に連載した「前世紀星」(これも中断しました)です。つまり、「ロストワールド」は未練がましく五回も書いています。気がればまたぞろ書き改めるかも知れません。(一九八二 注1)

この証言を信じると、次のように推敲が行われたことになる。書誌をおぎなつて記しておく。

- ① 私家版(中学二、三年)
- ② 私家版(改訂版 全3巻 S18~19)
- ③ 新聞連載(関西輿論新聞 S21)
- ④ 赤本単行本(不二書房 全2巻 S23)
- ⑤ 雑誌連載(「前世紀星」 冒険王 S30)

作者の証言なのでそうなのかと思ってしまう。しかし『ロスト・ワールド』という作品は、意外に謎をはらんでいる。

たとえば松本零士、大城のぼるとの対談のなか

で手塚は、「この『ロスト・ワールド』というのは前後四回描いて、最初に描いたのは中学三年のころ」で、「何百ページも描いて友だちに見せてるうちに空襲で焼けちゃった。」（一九八二注2）と発言している。五回でなく四回、中学三年のころの作品が焼失して手元にないと、先の記述とくいちがいをみせている。先の引用および対談の期日は、両資料の刊行がともに一九八二年なので、近い時期のはず。なのに相違があるのだ。さらに次のようにも言う。本人の証言をつづけて検討してみよう。

さかのぼること六年前、桃源社から複製された同作の「あとがき」（一九七六注3）によれば、「ロスト・ワールド」を最初に書いたのは、「昭和十八年頃でした。まだ中学校のころで」、「やつと墨汁とペンを使って書き始め、とにかく書きたいものをひたすら書いた、という時代の作品」だという。また、「『ロスト・ワールド』の前に、同じようなSF物語で『幽霊男』という作品を書いたとも記している。さらに同じ文章で、「そのノートをもとに、昭和二十二年の中ごろか

ったのではという気がしてくる。

記憶の揺れは、先の①〜⑤の一覧に対応させると次のようにまとめられる。

- ①初の執筆……中学二年か三年の頃、またはS18。「幽霊男」のあとに執筆。
友達に貸して焼けた、あるいは現存。
焼けたのは「ロストワールド」、あるいは「恐怖菌」。
- ②改訂・私家版……全3巻 S18〜19頃
あるいは言及がない。
- ③新聞連載（関西輿論新聞 S21）
- ④赤本単行本（不二書房 全2巻 S23）
S22年中頃から執筆
S22年に出版社に預けたとも
- ⑤雑誌連載（「前世紀星」の題 冒険王 S30）

◆描き変えの真相

右の①の初の執筆の項は、「中学生二年か三年の頃」「あるい昭和十八年」と併記して、わざと年代の照合を行わないままにしておいた。なぜか

ら単行本にして出版しようということを書き直していった」「こうして出来上がった『ロスト・ワールド』も、昭和二十二年に不二書房の方へ原稿を渡したのですが、なかなか単行本にならず、あとから書いた「月世界紳士」「有尾人」の方が先に出版されてしまい、一年ほど原稿を寝かされた」とも回想している。また、「この『ロスト・ワールド』だけは戦後まで残って、今でも肉筆のノートを持ってい」という。

昭和十八年頃、「幽霊男」のあとに執筆。昭和二十二年中頃単行本化のために再編、出版を待たされたという。もとの創作ノートは手元にあること。

つづけて、石子順によるインタビューでは、友達に貸したまま焼けてしまった原稿の名は「恐怖菌」である、当時「恐怖菌」と「ロストワールド」「幽霊男」を三部作と称していたと発言している（『手塚治虫 漫画の奥義』注4）。

こうみてくると本人の記憶が混乱しているのに気づくだろう。あるいは手塚本人は記憶は確かなのだが、ある事情で発言内容を変えざるをえな

かというと、ここには手塚の本当の出生年が直接関わりあうためである。

生前手塚は自ら一九二六（大正一五）年生まれであると公言していた。ところが、死後すぐに手塚プロダクションは、一九二八（昭和三）年生まれであると訂正記事を出す。生前は本人自ら二歳年上であると偽っていたというのである。この二年の違いが、「ロスト・ワールド」の執筆年を混乱させている直接的原因であるはずなのだ。

もし、手塚が一九二六年生まれなら、中学二年とは昭和一四、五年（一九四〇、四一年）頃に該当。

しかし、実際には一九二八年生まれの手塚が北野中学に入ったのが、一九四一（昭和十六年）、一二歳。卒業は、四五（昭和二〇）年で十六歳のことだ。この年、一六歳の八月に終戦を迎え、十一月には満一七歳となっている。

こうした事実にもとづくと、①にある初の執筆にあたる「中学二年か三年の頃」とは一九四三年から四四年（昭和一八年から一九年）となる。これは②改訂・私家版（全3巻）の描かれた「昭和

十八、十九年頃」という時期とも符合する。また、①の初執筆が、友達に貸して焼けたとか、あるいはそのまま現存すると発言が揺れ、また、焼けたのが「ロストワールド」であるとも「恐怖菌」であると言っているのも、次のように解釈すると納得できる。つまり、①と②は昭和十八、十九年の同じ執筆ノートのことを言っているのではないか、②のような改訂版は存在しておらず、不二書房版単行本に先行するのは、一種類の私家版のみだったのでないか。(改訂版の)「ロストワールド」を焼失したという記憶は「恐怖菌」の思い違いではないかということだ。

しかし、次のような資料をみると、またまた混乱が起こってしまう。

手塚は生前、何度か自分の日記を公にした。活字に組まれた日記には、この当時の作品の成立をうかがわせる記述が頻出する。それらの情報と対応させると、いま言った推定も、また根本的にひっくり返ってしまう。

一九四五年の日記「思い出の日記」昭和二十年「(全集別巻13 注5)によれば、「幽霊男」

執筆の記録が、一九四五(昭和二〇)年の四月二十五日の項に見える。なぜ「幽霊男」に注目するかというと、「ロスト・ワールド」の執筆が「幽霊男」のあとであると、しばしば口になっているからだ。また、複製された『幽霊男』(一九九五朝日新聞社)の中扉のあとのページに「てづかまんがそうしょ2」と記されている点が注目される。同様の図柄が私家版3巻にも「同 4」「同 5」「同 6」と記されている。つまり、全3巻の私家版は一九四五年の半ば以降の作品ということになってしまふのだ。

さらには、講談社版の手塚治虫漫画全集『新宝島』(一九八四年一〇月)巻末には、一九四六(昭和二十一)年の日記が収録されている。そこには、『ロスト・ワールド』の記述が頻出するのだ。該当する部分のみ引き抜いてみよう。6月2日「終日二階で、「ロストワールド」をかく。」、6月7日「本日は学校をさぼって、一日「ロストワールド」をかく。」、6月9日「終日、「ロストワールド」とピアノに専心す。」、6月14日「今日もさぼって、午前中「ロストワールド」を

かき、昼からピアノに専心す。」、6月19日「帰りて「ロストワールド」をかく。」、6月23日「昨日買った墨汁で、一日「ロストワールド」を

かく。」、あと内容は略すが6月26日、7月8日、7月18日、7月27日、7月28日に記述が見られる。また、8月6日の項には、「一日「ロストワールド」に取りかかり、まだ充分乾いていないのに父に製本してもらったら、製本の仕方があまりに不器用で、見かねてグズグズいったら、がぜん機嫌が悪くなった。」と書いている。これ以降「ロストワールド」の記述は消え、8月16日から「ロマン島」の製作が始まったことが読み取れる。

この四六年の記述が、不二書房版の原稿書きとは考えにくい。いまだ『新宝島』(一九四七・一)の刊行前であり、不二書房から出版依頼があったと考えるには無理がある。父親に製本を依頼という記述からも、私家版であることをうかがわせる。この四六年の「ロスト・ワールド」が、五年の「幽霊男」につづく創作であると考えれば、「てづかまんがそうしょ」の号数との整合性も生まれる。

以上のことを総合すると、次のようになるはずだ。

- ① 私家版……全3巻
一九四六(S21)年
- ② 新聞連載……関西輿論新聞
一九四六(S21)年一〇月
- ③ 赤本単行本……不二書房 全2巻
一九四八(S23)年一二月
- ④ 雑誌連載……「前世紀星」の題 冒険王
一九五五(S30)年一月、六月

手塚は自分が一九二六(大正一五)年生まれであることについて自分に言い聞かせてきた。二八(昭和二)年生まれであることから生じる年のズレ。それが一気に「ロスト・ワールド」の成立を戦中にまで遡らせたのだと考えられるのだ。

——戦後に描いたが二六年生まれとすれば随分のちの創作となってしまう、ならば戦前戦中の作品としてしまえ、あいだにもう一度描き変え版があることにしよう……そうした創作が働いた



▲①私家版単行本 (1946)
▲②「関西輿論新聞」連載 (1946)

▼④「冒険王」連載 (1955)
▼③不二書版単行本 (1948)



ある。
まわり道をしたが、『ロスト・ワールド』の周
辺の事情は整理できたのではないかと思う。
では、遅まきながら作品の比較検討に入ること
にしよう。

のではないか。そのようにズラせることによって、
年齢のつじつまを合わせるとともに、自らの早熟
さを演出しようとしたのではないだろうか。
ちなみに『手塚治虫全史』（一九九八 秋田書
店）に記載された「手塚治虫の事績」には、一九
四六年の項に「最初の「ロストワールド」を描く。
」と記されている（注6）。死の翌年から始まっ
た手塚治虫展のカタログでの記述も同様だ。おそ
らくいま述べたような経緯の検討からそう記すこ
とになったのではないのか。
ただ、空白として残るのは、戦中に描かれたか
もしれないノート類の存在である。ひよつとする
ところとしたペン書きではない形で描かれたノート
があるのかもしれない。その存在を否定すること
はできない。が、現時点ではその推敲を、先にし
るした①④の段階の上に考えざるをえないのだ。
やや、年代推定にペー지를費やした。こうした
ことがらはきちんと整理する必要があるし、初め
ての創作が戦前戦中に起草されているのか、戦後
のものなのかは、やはりマンガ史を考える上で大
きな問題をはらむと思うので検討しておいたので

◆私家版と不二書房版との相違

まず最初に、『関西輿論新聞』掲載の
「ロスト・ワールド」を考察の対象から
外す点をことわっておかねばならない。
その理由は掲載作品が閲覧できないため
である。今後調査を続けるつもりだが、
いまのところ具体的に見ることができ
るのは、『手塚治虫全史』あるいは『手塚
治虫マンガ大全』（一九九七 平凡社
注7）掲載の二回分のみである。図2に
その一回分を転載しておいた。

8コマ構成、この一回分の作品をみる
かぎり、私家版や不二書房版とは雰囲気
の異なるマンガであることがわかる。新
聞連載という制約なのか、毎回コミカル
に読者を惹きつける配慮があらわだ。そ
のぶん軽薄さが垣間見える。人物がやた
らさわぎたてコミカルで、戦後を感じさ
せる話題性も取り込んでいる。ブタモ博
士が好色であると描かれている点やヒゲ
オヤジの役回りなどに注目すべき点が



図2 関西輿論新聞掲載作品（『手塚治虫マンガ大全』一九九七 平凡社より転載）

表1 私家版①と不二書房版③との比較

私家版 (1946)	P数 コマ数		不二書房版 (1948)	
	P数	コマ数	P数	コマ数
◆第1部 エネルギー石 ヒゲヤジの記録の最初	2	1		
或夜の惨劇	18	54	ある夜の惨劇	9 43
現場捜査	8 (2)	26		
ミイチャンの身上	10	28		
人間教育	15 (2)	40	ガラス屋敷	14 40
告白	13	39		
ママンガ星	10	30	ママンガ星	9 33
偽物	20	60	偽物	10 44
真逆様	20	54	真逆様	23 71
大渦巻	9	27		
◆第2部 植物人間				
謎屋敷	8	24		
詭計と謀計	14	37	畏におちた畏	14 47
復讐	16	48		
袋の中の兎	24	72	袋の中の兎	13 57
オヤジの最期?	8	23		
爆薬の花籠	20	60	爆薬の花籠	14 59
植物にして霊	19	49	植物にして霊	14 35
◆第3部 怪新聞記者				
凶兆	19 (3)	49	搭乘	9 24
※最初の密航者	(14)	?	◆宇宙編	
※宇宙籠城	(10)	?	最初の密航者	9 30
※奇蹟	7 (7)	20	宇宙籠城	6 21
豚藻の秘密	13	37	奇蹟	7 19
			豚藻博士の秘密	7 21
◆第4部 前世紀				
探検隊	34	101	探検隊の出発	22 47
			一発の銃声	16 50
プラテオソールス	20	56	ティラノサウルス	16 51
植物の恋	24	71		
運命の嵐	7	19	運命の暴風	8 22
大団円	12 (2)	37	大団円	
			宇宙に悶える男	19 59
ヒゲヤジの記録の最期 (結び)	2 1	1 1		

表中※印は、目次に記載された章。該当ページが欠落している。()内の数字は、欠落ページ数を表す。欠落ページは、P数のカウントから除外してある。

あるが、私家版や単行本と比較するとはるかに見劣りする。そこで②の新聞連載については、全体像が判明した時点で検討することにして、ここでは、①私家版(3巻 一九四六)、③赤本単行本(2巻 不二書房 一九四八)、④雑誌連載(「前世紀星」 「冒険王」 一九五五)の三者を比較していくことにしたい。

まず、私家版①と赤本漫画として出版された不二書房版③との相違を明らかにしてみよう。両単行本には、それぞれの目次がついている。また本文も目次に対応した章立てがなされている。いまそれをもとにして、両者の違いを見てみることにしよう。私家版の方には、四〇ページほどの脱落があるが、その構成を想像しておぎないつつ考えたい。両者の違いを一覧したのが、表1である。

表をよく見てほしい。ページ数とそれぞれの章のコマ数を数えて記しておいた。構成の点では、大きな相違のないことに気づく。表中※印は、本文が欠落してはいるが目次に細目があがっている。

もので、その情報を記しておいた。

全体の構成に変わりがないものの、ある部分の省略や簡潔化した圧縮のありさまがわかるだろう。

まず、私家版①は「エネルギー石」「植物人間」「怪新聞記者」「前世紀」という四部構成から成り、全体の規模を比較するため欠落ページを含めて数えると、それぞれ一二七、一〇九、七三、九九のページ数が費やされている。3部までが地上のできごと(計三〇九ページ)、4部(計九九ページ)が宇宙船内やママンガ星での物語だから前半にかなりのウェイトをおいて描きつがれていることがわかる。対して、不二書房版③では、「地球篇」と「宇宙篇」の二部構成。1部が一二九ページ、2部が一〇〇ページだから、等分に配置されている。

つまり、私家版をもとにして不二書房版に至る過程で、前半が大幅に簡略化されたわけだ。この点は、私家版の前半が冗漫に過ぎて失敗しているということ、必ずしも意味しない。あとで述べるが、この私家版で手塚はこれまでの漫画の形式にない叙述の展開を試みていたのであり、前半

表2 ①と③の頁・コマ総数

私家版 (1946)			不二書房版 (1948)		
	p総数	コマ総数		p総数	コマ総数
1部	123	358	地球編	129	453
2部	109	313			
小計	232	671			
		(*2.89)		(*3.51)	
3部	39	106	宇宙編	110	320
4部	97	284			
小計	136	390			
		(*2.87)		(*2.91)	
総計	368	1061	239	773	

私家版では、1部の「ヒゲヤジ」の記録の最初、4部の「同最期」および結びの1pはか外から外した。
()内*印の数字は、1pあたりのコマ数の割合である。

のこうした小説にも似た描写のくどい積み重ねは、手塚治虫というマンガ家の新しい表現への道のりにおいて、通過せざるをえないステップでありえたからだ。

ともかく、描き変えの過程で、前半の描写が大きく圧縮、ないしは省略された。では、その省略圧縮のありさまは、具体的にどういったものか。表1から、ページ数とコマ数のみを合計して対比したのが、表2である。ここではページあたりのコマの割合を考えるために、欠落ページを除外しカウントしてある。

私家版の1部と2部計二三二ページは、不二書房版では一二九ページに縮められている。コマ数で言えば、六七一コマから四五三コマへ。ページ当たりのコマ数の割合で換算すれば、2.89から3.51へと増加している(表中の*印参照)。ページ数を減らした分、ページあたりのコマ数を増やして補おうとした跡がうかがえるのだ。3部4部をまとめると宇宙篇では、そうした省略や圧縮の形跡が乏しい。よって前半の再編に苦労したことがわかるのである。

◆叙述の長短

さらに具体的に言うと、前半の省略や圧縮は次のようだ。

まず、どの部分が省略されたのか。第1部「エネルギー石」では、出だしの強盗暗殺の場面、敷島博士のいる研究所のシーンが改編されている。特に省略が目立つのは、ミイちゃんの身上を解説したくだり(「ミイちゃんの身上」の項)だ。ミイちゃんは店先で商品として売られていたのだが、敷島博士がそれを見とめて譲りうける。そのうち実験に失敗した敷島博士の放浪の様子が描かれているが、不二書房版ではすべて省略されている。

また、完全な省略ではないが短く再編されたのは、1部の「或夜の惨劇」「現場捜査」の章で、不二書房版では、「ミイちゃんの身上」の項とともに「ある夜の惨劇」の1章にまとめられている。同様に「人間教育」「告白」の2章が「ガラス屋敷」の章に、2部の「詭計と謀計」「復讐」が「毘に落ちた毘」に、「袋の中の兎」「オヤジの最期?」が「袋の中の兎」に。それぞれ数章をひとつに括るとともに、大幅なコマの省略が

施されている。こうして1部、2部の二三二ページが一二九ページに圧縮されたのだ。

おそらく物語前半の省略や圧縮は、私家版の構成力が未熟であるという事情とも関わっている。全体が四〇〇枚近い大作。青年手塚は、全体の構成をつねに考慮しつつ描き出したわけではなく、おそらく大体の構成を頭におきつつ、叙述を進めたのではないだろうか。

その一方、前半の冗漫な記述には、戦後すぐの私家版が従来の漫画の枠を越える表現として構想されたという事情も、直接影を落としているはずだ。私家版の中扉には、次のような言葉が1ページを費やして書かれている。「これは漫画に非ず小説にも非ず」。いわば宣言文である。漫画でもなく小説でもない…、おそらく当時の手塚青年の意識のなかには、小説のような構想力をもつ漫画が意識されていたにちがいない。小説のように人物描写が巧みで、複雑な人間模様を折り込む。小説のような広大な構想力のもと、人間の真実を描きこみ、悲劇をも辞さない。これまでの物語漫画というジャンルが持ちえずにいた世界を、視覚

表3 不二書房版③と雑誌版④とのコマ数比較

不二書房版 (1948)	雑誌版 (1955)	
コマ数	コマ数	
ある夜の惨劇	43	38
ガラス屋敷	40	21
		5
ママンゴ星	33	34
		12
偽物	44	24
真逆様	71	28
		19
畏に落ちた畏	47	33
		8
袋の中の兎	57	37
爆薬の花籠	59	12
		44
植物にして霊	36	16
(途中まで)		
総計	430	331

雑誌版のコマ数は、不二書房版と対応させて、6回の連載を細分化して示した。

では、3回目の描き変えとなる「前世紀星」④（『冒険王』連載）の執筆にあたっては、かなりの修正を施したのだろうか。再度大幅な編集を加えられたかという点、実際にはそうではない。一九五五年から雑誌連載となった「前世紀星」では、ほぼ不二書房版の構成が踏襲されているのだ。不二書房版③は、いわゆる「描き版」によるもので、手塚の絵がそのままにプリントされてはいない。作者にとつては不本意な本であったわけだが、雑誌版では当然のことながら写真製版されて、画風がそのままに示される。それを直接比較するのは乱暴だが、構図やコマ割りのありかたを見ても、3点に限って簡潔化が見られるものの、他のコマはきわめて近似している。

表3に、ページ数とコマ数の変化を一覧してみた。残念ながら雑誌版（『冒険王』一九五五・一〜六）は完結せずに中断してしまっている。だから、比較できるのは物語の前半部分だけとなるが。

◆「前世紀星」への変化

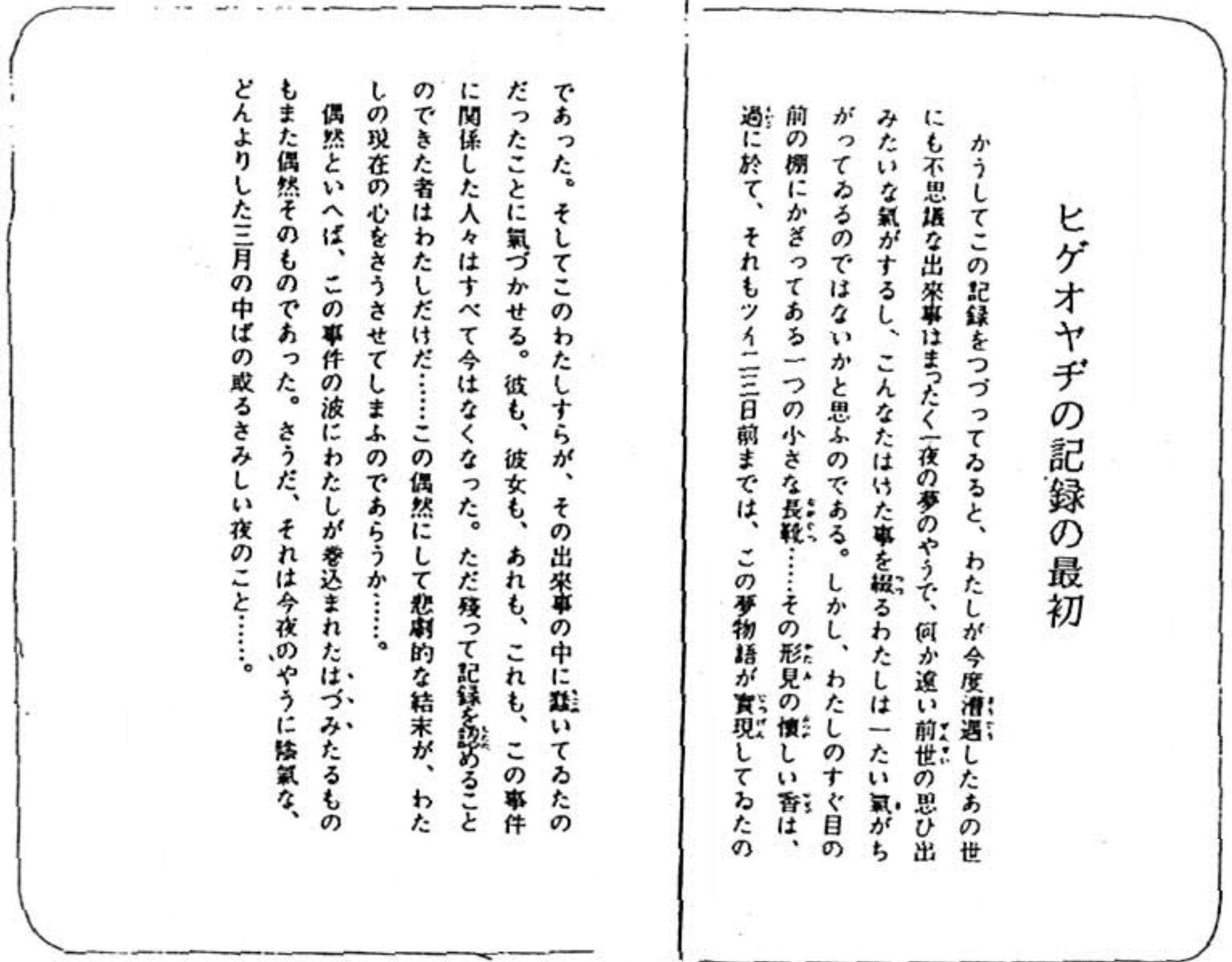
不二書房版③は、私家版①に大幅な変更を加えて成立した。単行本化に際して、紙数の制限等の実際的な制約も働いたものと思われる。無理も生じたはずだ。

化したいと願ったにちがいないのだ。「これは漫画に非ず 小説にも非ず」という言葉は、そういう意図をうちに含む。

そうみると、私家版の冗漫さにはそれなりの意味がある。今日のマンガ表現に照らすと冗長に映るコマ展開、セリフ内部の言葉が説明的で、また量としても多いのは、その反映とみなせる。不二書房版③で省略されてしまったが、①の私家版におけるヒゲオヤジの回想の文章（図3）は、物語の出だして見開きで示されており、あきらかに小説の形式を強く意識したものにはちがいない。

私家版の冗長な表現は、のちその姿を変える。二年後の不二書房版においては、マンガ的な昇華が行われる。それも小説や映画に固有の構想力、および人間模様の描写をうまく残したままで。だから、私家版の『ロスト・ワールド』は、小説（あるいは映画）の雄大な物語世界を漫画に映しかえるための必要なステップであったとみなせるのだ。

図3 私家版第1巻 出だし



ヒゲオヤジの記録の最初

かうしてこの記録をつづつてみると、わたしが今度遭遇したあの世にも不思議な出来事はまったく一夜の夢のやうで、何か遠い前世の思ひ出みたいな気がするし、こんなにはけた事を繰るわたしはいたい気がちがつてゐるのではないかと思ふのである。しかし、わたしのすぐ目の前の棚にかざつてある一つの小さな長靴……その形見の懐かしい香は、過に於て、それもツイ二三日前までは、この夢物語が實現してゐたの

であった。そしてこのわたしですが、その出来事の中に驚いてゐたのだったことに気づかせる。彼も、彼女も、あれも、これも、この事件に關係した人々はすべて今はなくなつた。ただ残つて記録を助めることのできた者はわたしだけだ……この偶然にして悲劇的な結末が、わたしの現在の心をさうさせてしまふのであらうか……。

偶然といへば、この事件の液にわたしが巻込まれたは、ぶみたるものもまた偶然そのものであつた。さうだ、それは今夜のやうに陰気な、どんよりした三月の中ばの或るさみしい夜のこと……。

図4 右)

『冒険王』連載の出だし (1955・1)



図5

右下) 不二書房版 (1948)
下) 『冒険王』連載作 (1955)



不二書房版は基本的に一ページ三段割り、雑誌では四段割りなので、単純比較はできない。しかし、コマ数のみからもわかるように、それほど大きな変更がなされていない。雑誌版は全部で三三〇コマ(タイトルのコマも含む)から成り立つが、不二書房版でそれに対応する部分は、初めの四三〇コマである。一〇〇コマほどが少なくなったわけだが、これはいくつかのシーンを省略したことから生じている。もつとも大きな省略は、ア) 研究所で敷島博士が動物たちに人間の言葉を教えるというくだりで、これがまるごと省かれている。イ) 「真逆様」における格闘シーンの簡略化、および、ウ) 「植物にして霊」で豚藻博士が科学的説明を延々行う部分などである。

ウ)の省略などは、私家版①から不二書房版③に変容する過程で、ミイちゃんの間人化への説明が省略された点と対応する。描き変えのたびに、科学的な説明が減少していくのだ。言葉による理屈よりも、行動描写による活劇シーンの方が重視されていく道筋がみてとれるだろう。

ア、イ、ウ以外では、わずかな省略が見られる

程度。大筋、構図のとり方に変化があったり、細部の追加があるものの、構成の上では不二書房版と大きな変化がない。

ただ、人物の動きや構図のとり方は格段進歩しており、七年のあいだに飛躍的に進歩をとげた作家の力量に驚かされる。

雑誌版における出だしのシーン(図4)などは、まさしく映画的回想シーンである。一九四六年の私家版の出だしでは、ヒゲオヤジの回想が小説形式となっていたが、その点で大きな開きを見せている(図3参照)。不二書房版では略された部分だ。私家版①に小説形式で存在した回想シーンが、不二書房版③では落とされたものの、雑誌版④において再びマンガ的表現によって復活しているのである。

構図の変化については注意しておきたい。両者を比較した図5を見ていただくとよいが、立体的な構図に組みかえられてるコマが目立つ。奥行きある視点が選ばれているのだ。

ただ、ヒゲオヤジと悪人の格闘シーンは、迫力が後退している。不二書房版では一ページ、ある

いは半ページ大の大ゴマを多用して迫力を生み出していたが、雑誌版では、数コマを一ページに組み込む形に矮小化されている。作者の意志ではなく、書き下ろしと連載の違いの制約が、こうしたコマ割りに顔出ししているのだろう。

雑誌版④が不二書房版③と構成上大差がないということは、とりもなおさず不二書房版を出版した一九四八(昭和二十三年)の時点で、手塚は小説を漫画的に発展させた新しい表現を獲得していたということになる。

◆4本指のヒゲオヤジ

手塚の、一九四〇年代後半の数年間における絵の技術的進歩には、めざましいものがあつた。大阪で赤本漫画を毎月描き下ろすうちに、自然と表現の方法を身につけていったにちがいない。

実際、一九四五年から四六年の(つまり私家版①の執筆時期の)絵と、四九年前後の絵とは大きな開きがある。両時期に①私家版の「ロスト・ワールド」(一九四六)と、③不二書房版「ロスト・ワールド」(一九四八)が対応しているわけだ

が、別の作品を引き合いにだしても、その点ははつきりするはずだ。

「ロスト・ワールド」に先立って「幽霊男」を描いたという手塚の証言は、先に記したとおりだ。日記によると「幽霊男」の執筆は一九四五年のなかば、終戦前のこと。のち「火星博士」や「メトロポリス」に受け継がれる内容をもつマンガだった。

ちなみに死後複製された「幽霊男」のページをめくると、図6、図7のような興味深いコマに出あう。なんとヒゲオヤジが二人、同じコマのなかに描きこまれていないではないか。図6には後に倒れるのを支えるもう一人のヒゲオヤジ。図7には、同じ動作を繰り返すまた一人のヒゲオヤジ。物語展開とはまったく関係がないのである。一見してわかるが、これはあとからの書き加えなのだ。その証拠にヒゲオヤジの指の数を数えてほしい。

4本指になっていることがわかるだろう。マンガ家としてスタートしたあと手塚は、ディズニーのキャラクターをまねて、人物の指を四本にして描いた。しかし、それに先立つ私家版「幽

はつきりと理解できる。

おそらく、赤本漫画を次々と描き下ろして、技術的に進歩をとげていった手塚が、過去の習作を手にし、ふといたずら心を起こして手を加えたのだと思う。これほど歴然とした画風の違いはないだろう。その書き加えも、数年のち、つまり五〇

年以前のことと思われるのだ。つまり四〇年代後半の数年で、手塚の絵のテクニクが格段に高度化した。その格差を、この4本指のヒゲオヤジが端的に示しているというわけだ。

◆小説から漫画へ

以上、三つの「ロスト・ワールド」を比較してみた。敗戦後すぐに描かれた私家版①（一九四六）、その数年後に赤本漫画として出版された不二書房版③（一九四八）、のち「冒険王」に連載された雑誌版「前世紀星」④（一九五五）。

この三つの作品の推移は、手塚治虫という作家の成長のあとをあますことなく伝えている。それは、個人の成長を指すとともに、ストーリー・

図6 私家版「幽霊男」



図7 私家版「幽霊男」



霊男」や私家版「ロスト・ワールド」では、人物はつねに五本指で描かれていた。また求心力のあるまるまっちい絵柄のスタイルを見ても、もう一人のヒゲオヤジが、のちの描き加えであることが

マンガというジャンルそのものの発展のあとをも記す指標でもありえる。

手塚は新形式のマンガを構想した。その創案に、近隣の文化に刺激を求めた。手本となったもつとも身近かな文化が、小説であり、演劇であり、映画であったにちがいない。今日の視点から見た場合、当時のこうした試行錯誤のあとは、ただ文章表現が冗漫でコマ割りがやぼったく映るかもしれないが、時代はそうしたステップを必要としたのである。

「ロスト・ワールド」は、荒唐無稽なSFである。私家版①は戦後の作品であるものの、その発想や志向の根は、戦前戦中にはぐくまれた手塚少年の科学観や世界観に行き着く。

その一方、戦後の一九四六年に描かれた作品であるとするなら、戦後の影を一身に背負っているとも受け取れる。ラスト近くの兎のミイちゃんの悲劇的死は、戦争を通過したあとの作者の死の観念を含んでいるのかもしれない。空襲で人の死を身近かに見た感覚が反映されているのだとすれば、

手塚が戦後のマンガに付け加えた悲劇性というドラマの性格は、きわめて時代性をうちに秘めたものだったことになる。

また、エネルギー石なる不可思議な力をもつ鉱物の正体も、原子爆弾が炸裂したあとの日本の状況のなかでの、きわめて身近な素材であったかもしれない。(実際、④の雑誌連載では、原子力との関わりが語られる。)

さらには、エロティシズムの表出も時代と結びつく。植物という安全弁がかけられているが少女もみじはランプという中年男の餌食となる、また二人の少女は豚藻という醜い男の性的対象として造りだされる、さらに敷島博士と少女あやめはママンガ星のアダムとイブになる。こうした素材をそのままマンガにぶちまけた背景には、カストリ雑誌やストリップショーが流行した敗戦直後の空気が吸引されているのかもしれない。もともと手塚は大人向けのマンガ家を目指していたというし。

こうした理解の仕方は、そうであるかもしれないし、そうじゃないかもしれないという恣意的な

- 3 「あとがき」 手塚治虫 『ロスト・ワールド』 桃源社 一九七六年八月 二四三ページ 二四四ページ
- 4 手塚治虫(聞き手リ石子順) 『手塚治虫漫画の奥義』 講談社 一九九二年一二月一〇五ページ
- 5 手塚治虫 「思い出の日記―昭和二十年―」 『北野中学の思い出』 北野中学の思い出発行委員会 一九八五年九月 (引用は、全集 別巻13 手塚治虫エッセイ集6 七三ページより)
- 6 「手塚治虫の事績」 『手塚治虫全史』 一九九八 秋田書店 二一三ページ
- 7 「手塚治虫マンガ大全」 (米沢嘉博構成 別冊太陽) 一九九七 平凡社 八ページ

範囲のものだ。時代が作品にそのまま反映する可能性もあるし、そうでない場合も実際には多いからだ。ただ、事実として「ロスト・ワールド」は奇異な素材の目立つ作品であるし、その一方戦後すぐの作品である可能性が高く、そのためさまざまな想像がわくのである。

「ロスト・ワールド」というマンガは謎に満ちている。と同時に、手塚治虫という作家の営為を知るためにも、また戦後のストーリー・マンガの展開を理解するにも、カギとなりえる重要な作品である、その点はまちがいのない事実である。

注

- 1 (あとがき) 手塚治虫 『ロスト・ワールド』 3 (日本名作漫画館SF篇) 名著刊行会 一九八二年二月 一八一―一八二ページ
- 2 手塚治虫・大城のぼる・松本零士 『OH! 漫画』 一九八二年六月 晶文社 (引用は、手塚治虫漫画全集 別巻8 手塚治虫対談集2 八六ページより)



楽天から手塚まで、戦前から戦後への子どもマンガの歴史を、作家ごとに検証。宮尾しげを、田河水泡、山川惣治、矢野龍渓など、取り上げたマンガ家は多数。

■竹内オサムの本

マンガと児童文学の〈あいだ〉	大日本図書	品切れ
手塚治虫論	平凡社	1860 円
戦後マンガ50年史	筑摩書房	1400 円
子どもマンガの巨人たち	三一書房	2300 円
マンガの批評と研究+資料	私家版	1200 円
児童文化と子ども学	久山社	1600 円
漫画・まんが・マンガ	青弓社	1600 円
絵本の表現	久山社	1600 円

◆ホーム・ページ作りが苦手という面もあるでしょう。一度、ソフトを買って挑戦したという過去。一夏かかって力作をものにした。ところが途中でパソコンの調子が悪くなり、データがすつとぶことに。それからパソコン恐怖症に、いやホーム・ページ作成恐怖症に陥りました。いつまで経っても現状を打開できぬまま、冊子づくりを続けているというわけです。

◆やはりひと昔古い人間なのかもしれません。パソコンの画面より、やはり手にすることのできる冊子、物質感をこよなく愛する人間なのです。造り上げたという実感を自らの住む空間に確認できる、そんな現実感を大切にしたい——と、かつこよく自分に言いわけしつつ、またチマチマと冊子作りに精を出すことにいたしました。

◆ネット嫌いではありません。ですから、ネット上でPRしていただけるなら、ほとんどお願いしたいものです。ただし論文、書誌、作品そのものの公開はご一報下さい。著作権の問題が関わりますので。

◆最後に近況を。今年の夏のイベントは、オリンピックも楽しいですが、やはり山がらみ。東北にある月山鳥海山へ友人と出かけました。以前一人で登ったことのある山。高山植物が豊富で残雪も多く、また山容もすてき。日程をこなし家に帰ってグターツとしていると、お隣りのご夫婦も山へ。月に3〜4回は出かける

のだという。新潟や群馬まで車でスイスイと。百名山を登りつくすおつもり。もう七〇歳近い方なのに、猛烈なパワーなのです。いやはや驚くことばかりです。

◆いやー、負けた、負けた。今年は負けた。夏の暑さに負けた。お隣りさんにも負けた。世の中には、ほんとすごい方々がたくさんいらっしゃるものです。謙虚に生きねばなりません。そう反省する中年どんづまりのオサムさんなのでした。

◆「——ピランジ」は、無料の冊子です。どなたにでもお送りしています。ただし、郵送料として、一冊につき二四〇円分の切手が必要です。バックナンバーの紹介ページで、在庫の有無をご確認下さい。

また、「ピランジ」では原稿を募集しています。400字で四〇枚以内、ページ数で20枚以内。版下作成が原則です。締め切りは、05年の1月末。採否は竹内の判断によります。その点をご了承下さい。採否は竹内。それでは、また15号でお会いしましょう。

ピランジ 14号

発行者 竹内オサム (〒)

発行年月日 2004年9月20日

印刷 木村桂文社